

はじめに

2020年度は、すべての面において、新型コロナウイルス感染症に振り回された1年であった。研究会活動も例外でなく、対面でおこなえたものは2回で、あとはすべてZOOMを使ってのオンライン研究会となった。

前期は、大学のすべての授業が遠隔となり、活動規制もおこなわれたため、なかなか研究会を開催することができなかった。それでも、7月22日には、今年度、新たに本学に赴任され、『多民族社会における宗教と文化』グループに加わった現代ビジネス学科准教授の永田貴聖先生に、「フィリピン移住者が作る複数エスニシティ・ナショナルリティ関係」と題した報告をしていただき、何とか第1回目の研究会を開催することができた。感染症に配慮し、学内の教員に限って、短時間での開催となったが、何より、研究会をおこなえたことが喜びであった。

後期は、大学の授業が対面で7割程度となったため、対面での研究会開催を模索した。11月19日には、拓殖大学名誉教授の坂田貞二氏をお呼びして、対面で研究会をおこなうことができ、昔話の採録に関する貴重なお話を伺える機会となった。八木も北インドの婚姻儀礼と民謡に関する報告をおこなった。坂田氏には、本号に、昔話採録記録と『『ラーマの行いの湖（梗概）』と詩の邦訳』を寄稿していただいた。

その後は、感染状況が悪化することになり、オンラインでの研究会となった。12月18日には、永田先生が、『日本におけるアジア系海外ルーツの次世代たち』をテーマに、和歌山工業高等専門学校准教授の原めぐみ氏、日本学術振興会特別研究員・慶応義塾大学大学院の佐藤祐菜氏をゲスト・スピーカーとして、オンラインでの研究会を開催した。また、永田先生には、2月15日にも、コメンテーターに東北大学大学院文学研究科准教授の川口幸大氏を迎えて、立命館大学院博士課程の今里基氏による「日本から韓国への若者の移動の考察」、2月27日にも、久留米大学文学部准教授の神本秀爾氏による「ラストファーライの『日本的』受容について」と題した研究会を開催していただき、研究会活動を盛り上げていただいた。永田先生、原氏、今里氏には、今号に寄稿していただいた。

2月20日には、八木が司会して、本学大学院人文科学研究科修士課程の八重柏明葉氏による「インドの月経に関する文化人類学的研究」、本学卒業生で日本学術振興会特別研究員（PD）の工藤さくら氏による「ネパールにおけるナットウの嗜好化—gastro-politicsの視点から—」と題した研究会をおこない、いずれも本学卒業生である青山学院大学助教の菅野美佐子氏や本学非常勤講師の木曾恵子氏という先輩たちにコメンテーターとして参加してもらった。教え子の成長した姿をみることができ、指導教員としては感慨深いものがあった。なお、今年度の研究会の詳しい活動報告は、巻末に掲載している。

オンラインによる研究会では、事前予約が必要で、学生などが参加しにくいということもあったが、旅費がかからない分、結果的に、例年より多くの研究会を開催できた。来年度は、どのような形で研究会を開催し、研究活動をすすめていくか未定ではあるが、オンラインも併用することで、これまでより充実した研究活動につなげられるのを願っている。

共同研究代表 八木祐子